

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 26 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25885024

研究課題名(和文) 自閉症スペクトラム障害におけるコミュニケーション空間の特性理解

研究課題名(英文) Characteristics of communication space in autism spectrum disorder

研究代表者

浅田 晃佑 (Asada, Kosuke)

東京大学・先端科学技術研究センター・特任研究員

研究者番号：90711705

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：研究1では、自閉スペクトラム症(ASD)者のパーソナルスペースについての研究を行い、ASD者は他者に対して及び人ではない物に対して取る距離が定型発達者よりも短いという結果が得られた。また、ASD者も定型発達者も他者とアイコンタクトがある時にそうでない時よりも対人距離を長く取る傾向が見られた。研究2では、ASD者のボディイメージについての研究を行い、ASD者も定型発達者も自分の肩幅を実際の大きさよりも大きく見積もるが、その傾向はASD者で大きいことが分かった。

研究成果の概要(英文)：In research 1, we examined personal space in individuals with autism spectrum disorder (ASD). We found that individuals with ASD showed shorter preferred distance both from other people and objects than typically developing (TD) individuals. In addition, both individuals with ASD and TD individuals preferred larger interpersonal distance when eye contact was established than when it was not, in the case of another person approaching them. In research 2, we examined body image in individuals with ASD. We found that both individuals with ASD and TD individuals estimated their shoulder size wider than the actual size, but the tendency is clearer in individuals with ASD than TD individuals.

研究分野：発達心理学

キーワード：自閉スペクトラム症 パーソナルスペース ボディイメージ コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

自閉スペクトラム症(ASD)は、社会性・コミュニケーションの困難、パターン化された行動を繰り返すなどの行動上の問題を伴う発達障害である。これまで、他者の心的状態を推測する心の理論の障害説(Baron-Cohen et al., 1985)など多くの研究者が社会性・コミュニケーションの困難について研究してきた。しかし、近年、これまで積み上げられてきたそのような専門領域以外の点で、ASD 者が困難を抱えることを ASD を持った本人の手記が明らかにしている。例えば、ニキ・藤家(2004)では、ASD を持つ当事者が自分の背中の感覚が上手く感じられなくなることや、服に隠れている自分の身体領域の存在が感じにくくなるという報告がある。このような ASD 者が持つと想定される特異な身体性はコミュニケーションの重要な側面に関連する可能性がある。つまり、自分の体を起点としてパートナーがどのくらいの位置にいた場合コミュニケーションをとるべきか、また、人と関わるのに心地よい距離はどの程度かを決定する時に、この問題が関連する可能性があり、それは社会性やコミュニケーションの前提となるはずである。ASD のパーソナルスペースやボディイメージの問題は、その学術的・教育的重要性に比して研究が進んでおらず、今後の研究が必要な分野である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ASD 者における社会コミュニケーションの特性の前提となるであろうパーソナルスペースやボディイメージについて研究することである。

パーソナルスペースの研究では、自分と他者・物体との間の適切であると考える距離について調べた。特に、ASD 者と定型発達者との間で適切であると考える対人距離が異なるかを調べた。加えて、ASD 者が他者とのアイコンタクトの有無に応じて適切であると考える対人距離に違いが見られるか、また、相対する対象が人と物の場合で、自身との間に入る距離の違いに特徴(対人距離と対物距離の特徴)が見られるかを調べた。

ボディイメージの研究では、ASD 者に自身の肩幅の推定を行ってもらうことにより、実際の肩幅と参加者がイメージしている自身の肩幅との差を調べた。特に、ASD 者と定型発達者との間で実際の肩幅とイメージの肩幅との違いに差が見られるかを調べた。

3. 研究の方法

研究 1: パーソナルスペース

参加者は、実験者または対象物(実験者と似た服をかけたコート掛け)から 6m 離れて立ち、対象と「どれくらい近くだといやか」を以下の条件で判断した。また、実験者接近条件と参加者接近条件では、両者のアイコンタクトがある試行とない試行を 3 試行ずつ行った。

<実験者接近条件(アイコンタクトあり 3 試行・なし 3 試行)> 実験者が参加者に向かっていく条件

<参加者接近条件(アイコンタクトあり 3 試行・なし 3 試行)> 参加者が実験者に向かっていく条件

<物条件(3 試行)> 参加者が対象物に向かっていく条件

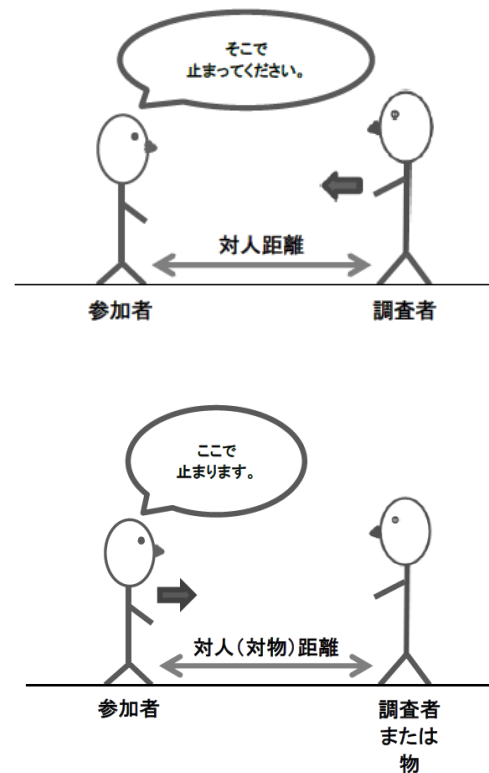


図 1. 研究 1 の様子 (上: 実験者接近条件・下: 参加者接近条件及び物条件)

研究 2: ボディイメージ

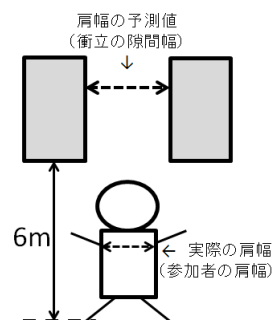


図 2: 研究 2 の様子

参加者は、調査に先立ち、肩幅を計測された。調査では、6m 先にある 2 つの衝立の隙間が参加者の肩幅と同じになるように衝立

を調整することが参加者に求められた。2人の調査者が衝立を動かし、参加者の発声による合図に応じて衝立を止めた。参加者は、閉鎖条件の後、開放条件に参加するという順番で、それを計3回行った(1回目は練習とし、2回分の平均を分析対象とした)。

<閉鎖条件>参加者の肩幅の2倍の幅の隙間がある状態から衝立が狭まっていく条件

<開放条件>2つの衝立が接触している状態から衝立の隙間が広がっていく条件

4. 研究成果

研究1: パーソナルスペース

ASD者が定型発達者よりも対人距離が狭いこと、また、両群において相手に接近される場合に対人距離が広くなり、かつ、実験者が接近する場合のみアイコンタクトの効果がみられること(アイコンタクトがある場合対人距離が広がる)が分かった。また、対象が人か物かで距離に差が見られるか検討した結果、ASD者が定型発達者よりも対人・対物距離が狭いこと、その傾向は接近対象により変わらず、両群で物よりも人に対して好む距離が広いことを示している。

ASD者が定型発達者よりもパーソナルスペースが狭いという結果は、ASDを持つ人とそうでない人で対人場面での空間イメージが異なっている可能性を示す。具体的には、ASDを持つ人では、かなり近くにいる人でないと他者が自分と関わる空間にいるという対象として認識されない可能性がある。群ごとに対象が人や物であるかで差が見られないので、ASD者のパーソナルスペースの狭さは人に対してだけに限定されないのかもしれない。

本研究は、英語論文として現在投稿中であり、日本発達心理学会第25回大会にてポスター発表された。

研究2: ボディイメージ

ASD・定型発達両群とも、自分の肩幅を実際よりも大きく見積もる傾向があり、その傾向はASD者で定型発達者よりも強いと言える。また、両群とも、衝立が狭まっていく閉鎖条件で、衝立が広がっていく開放条件よりも肩幅を大きく見積もる傾向があった。

両群で肩幅を実際よりも大きく見積もる傾向にあったが、これは障害物を避けるなどの日常の行動を考えると理に適っているといえる。一方で、ASD者で定型発達者よりも、肩幅を大きく見積もる傾向が見られた。ASD者は定型発達者よりも、自分の身体のサイズを実際よりも大きく捉えている可能性が示唆される。先行研究では、同様の手続きの研究を摂食障害のある人を対象に行った結果、摂食障害のある人はそうでない人に比べて、肩幅を大きく見積もる傾向にあった(Keizer et al., 2013)。この研究からは、拡大した自分のボディイメージと摂食障害との関連が示唆される。ASD者のボディイメージの拡大が

実際の行動とどのように関連するのか(例: 対人接触などの社会性の側面)、また、なぜ拡大したボディイメージを持ちながらも症状の表出がASD者と摂食障害者で異なるのかを今後検討する必要がある。

本研究は、日本発達心理学会第26回大会にてポスター発表された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計8件)

1. 浅田晃佐・東條吉邦・長内博雄・齋藤慈子・長谷川寿一・熊谷晋一郎 (2015年3月20日). 自閉スペクトラム症者のボディイメージについて. 日本発達心理学会第26回大会. 東京.
2. 浅田晃佐 (2014年9月20日). 『『ちょっといい会話』のルールってどんなもの?』. ソーシャル・マジョリティ研究会. 東京.
3. 浅田晃佐 (2014年9月12日). 社会性の発達と障害—自閉症スペクトラム障害とウィリアムズ症候群—. 日本心理学会第78回大会小講演. 京都.
4. 浅田晃佐 (2014年9月12日). 自閉スペクトラム症児における会話のルールの理解. 日本心理学会第78回大会シンポジウム「言語コミュニケーションの発達と障害: 実験心理学的研究から発達臨床への示唆」. 京都.
5. 浅田晃佐・東條吉邦・長内博雄・長谷川寿一・熊谷晋一郎 (2014年3月23日). 自閉症スペクトラム児におけるパーソナルスペースについて. 日本発達心理学会第25回大会. 京都.
6. Asada, K., Itakura, S., Okanda, M., Moriguchi, Y., Yokawa, K., Konishi, K., Kumagaya, S., & Konishi, Y. (2014, May 16th). Development of Pragmatic Language Understanding in Children with Autism Spectrum Disorder. International Meeting for Autism Research, Atlanta, USA.
7. Asada, K. (2014, May 5th). Understanding of conversational rules in children with autism spectrum disorders. Seminars on the Development of Social Communications: Insights into Cultural Effects and Communicative Disabilities, Tokyo, Japan.
8. Asada, K. (2013, December 6th).

Understanding of Gricean maxims in children with autism spectrum disorders. Development of fairness in typically developing children and children with autism spectrum disorders, Kyoto, Japan.

〔図書〕（計 1 件）

1. 浅田晃佑 (2014). 子どもの社会性の発達と障害—自閉症スペクトラム障害とウィリアムス症候群— 板倉昭二（編著）「発達科学の最前線」, ミネルヴァ書房, pp.169-187. 分担執筆

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浅田晃佑 (ASADA KOSUKE)

東京大学・先端科学技術研究センター・特任研究員

研究者番号：90711705

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし